

幸神話のように東南アジアとの関連が指摘される部分もあれば、天孫降臨神話のように、朝鮮半島やモンゴルとの関連が指摘されるものもある。日本神話には、日本人を形成してきた海外諸民族、諸文化の痕跡が、はっきり残っているのである。深層心理学者は、神話の構成そのものの中に、人間の「普遍的無意識」の反映をみる。心理学的にみると、神話に起きることと同じことが、神話など全く知らない人の夢に現れるというのである。たとえば、人間が「太母」から自立して、自我を確立していく闘いが、神話では、怪物を退治して、美しい娘と宝物を獲得していくストーリーに反映しているとする。その意味では、昔話にも神話の流れが入り込んでいるとみるのである。

【参考文献】天林太良編『神話』(一九六七、『現代のエスプリ』至文堂)
(小澤俊夫)

ス

水滸伝 すいこでん 明代の長編小説。宋の徽宗のころ、

宋江ら三六人が山東省梁山泊を根拠地にして反乱を起し、一時大いに官軍を悩ましたがのち降伏した史実がある。これが語り物として民衆にもはやされ、そのテキストに『大宋宣和遺事』などがあり、元代には戯曲化もされ上演された。英雄も三六人から一〇八人と増え、現在の形にまとめられたのが明代初期と考えられる。作者は施耐庵、あるいは羅貫中ともいわれ、また施耐庵作、羅貫中改編との説もあるがさだかではない。物語は北宋仁宗の世、伏魔殿から三六の天罡星、七二の地煞星が四方に飛び散り一〇八人の英雄となる。徽宗の世となり、悪がはびこり正義の士は追われ、花和尚魯智深、九紋竜史進、豹子頭林冲など一〇八人が梁山泊に集まり、天罡星、地煞星の生まれ代わりだと信じ、正義のために戦う。前半は英雄たちが梁山泊に集結するまで、後半、一〇八人が政治の不正と戦うが、のち朝廷に利用され不幸な末路をたどる物語である。本書は我が江戸文学に大きな影響を与え、滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』などはその例である。波乱万丈の興味のゆえに子どもにも迎えられ、多くの再話本が出版されたほか、漫画・アニメーション・人形劇などにも取りあげられた。
(君島久子)

推薦図書 としいせん 個人または公共機関や団体などが出版物の中から優れた著作と認めて薦める図書。推薦図書は、いずれも推薦者の立場と目的により一定の基

準をもとに選定される。そこで、図書の推薦が思想善導の手段となり読書の自由を犯すことのないように行われなければならない。全国的な規模では、中央児童福祉審議会が児童福祉法第八条第七項の規定に基づき、一九五一年一月から文化財推薦として推薦図書を発表している。

推理小説

うせりしよ

文学および児童文学の内容的傾向または様式で、主として犯罪にかかわる難解な問題が論理的推理によって解明されていくプロセスの面白さをモメントとした小説のこと。日本においては、明治期より昭和前期まで「探偵小説」の名で呼ばれており、第二次大戦後「推理小説」の称呼が一般化した。

推理小説の萌芽は世界の文学のなかに古くより存在していたが、一九世紀半ばのアメリカにE・A・ポーが『モルグ街の殺人』その他を書いて近代小説としての基礎を据え、イギリスのドイルやフランスのルブランなどの活躍によって成立した。児童文学の領域にあっても推理小説の占める空間は大きく、E・クイーンをはじめ過半の推理作家が少年少女向けの推理小説を書いており、また、『エミールと探偵たち』(ケストナー)や『名探偵カッレくん』(リンドグリーン)などのごとく児童文学作家も推理小説をこころみている。日本における推理小説は、江戸時代の井原西鶴『本朝桜陰比事』(一六八九)などを遠祖とし、明治中期の黒岩涙香・

原抱一庵等による欧米の推理小説の翻案に刺激されて出版、一九二〇年(大9)創刊の雑誌「新青年」を舞台とし、江戸川乱歩・小酒井不木・夢野久作などの登場によって開花したと言ってよい。日本児童文学の世界にあつては、早く明治期の大衆児童文学作家押川春浪に推理小説的な傾向の作品があつたが、本格的な出現は、昭和前期の「少年倶楽部」連載の江戸川乱歩『少年探偵団』(二二七)や森下雨村『謎の暗号』(三三三)などまで待たなくてはならなかつた。第二次大戦後には、乱歩の「少年探偵物」が書きつづけられて人気を得たほか、氷川瓏・渡辺啓助等が少年少女向けの推理小説を多く執筆、また童話作家の一面も持つ仁木悦子が『消えたおじさん』(一六一)などを書いたりしたが、時とともに忘れられた。思想的・社会的な主題をかえこまぬことの多い推理小説は、理知的性向の強くなった現代の児童・少年少女には、それが成人向きのものであつても容易に読みこなし得るようになってきており、そのため今日では、赤川次郎などの成人向けの作品がそのまま少年少女の読み物になっていると言つてさしつかえない。

(二上洋二)

スウィフト

ジョナサン Jonathan Swift 一六六七—一七四五年

イギリスの支配下にあつた時代のアイルランドの作家。ダブリンに生まれ、大学を出たのちイギリスに渡り、引退した外交官サー・ウィリアム・

テンブルの秘書となる。一六九九年に同氏が死ぬと同時に帰郷して聖職につくが、国教会の主教になりたいとの野心を抱いてたびたびロンドンへ出かけ、当時イギリスをゆるがしていた王党と民党との政争に加わり、風刺的パンフレットの執筆によって頭角を現す。

しかし、『*A Tale of a Tub* 桶物語』(一七〇四)で当国教会までをも槍玉にあげる毒舌ぶりは、出世には決定的に不利であった。一七〇九年までは民党側についていたスウィフトは、宗教政策上の理由から王党に鞍替えし、一四年のアン女王の死で王党が衰えるまで、党を代表する論客として活躍した。その見返りに得たダブリンの聖パトリック教会の首席司祭の地位が終生のものとなるが、その後は風刺文学の傑作である『ガリヴァー旅行記』(二二六)を執筆したほか、本国の苛酷なアイルランド政策の糾弾などに力を注いだ。しかし、晩年は精神に異常をきたし、最後の数年は痴呆状態という悲惨なものであった。『ガリヴァー旅行記』は、*フォーの『ロビンソン・クルーソー』(一九)とともに、小説という新しいジャンルの先駆けとなったといわれているが、そのどちらもが本来は大人の読むものであったにもかかわらず、たちまち子ども向けに書き替えたものが生まれはじめ、児童文学という新しいジャンルの先駆けともなった。『ガリヴァー旅行記』の場合、厭世的で毒を含んだ風刺は子どもに適したもの

とはいえないのだが、巨人国や小人国での奇妙な体験がリアルに描かれている部分の面白さには子どもを惹きつける力があり、『ふしぎの国のアリス』などのナンセンス文学や、小人や小動物を主人公としたファンタジーの、一つの源泉ともなっている。

「ガリヴァー旅行記」リョリバウキ *Gulliver's Travels* 一七二六年、風刺文学。船医ガリヴァーが難船して奇怪な国を訪れる物語で、四巻から成る。小人国の巻では政争の馬鹿らしさや人間の思いあがり、大人国の巻では肉体の醜悪さが主として風刺され、飛び島の巻では浮き世離れた学問の有害無益ぶりが語られ、馬の国の巻では、主人である馬たちの高潔さに比して、人間そっくりな獣ヤフーがいかに醜悪な存在であるかが苦い調子で語られている。(脇 明子)

スウエンソン ヨーン Jon Svensson 一八五七—一九四四 アイスランド生まれの童話作家。氷河や活火山の多い極北の島に生まれたが、少年時代にフランス人の神父に見いだされて島を離れ、デンマークやフランスで学び、五〇歳のころまでカトリックの神父や教師として各国で過ごしたが、第二次大戦で爆撃を受けて負傷して退籍したのを機に童話作家として立つに至った。その作は一切の作為を退けて、彼が少年として経験してきた事実をありのままに書いたものというが、育ったのが特異な極北の島であって冒険に富み、

筆致が天成の物語作者らしくのびのびとしてイメージが鮮やかで、加えるに底に流れる純真と敬信の念のため、たちまちに全世界で愛読されるに至った。日本でも『ノンニの大航海』『ノンニとマンニ』（ノンニは作者の少年時代の愛称でマンニは弟）、『極北のクリスマス』『ノンニ兄弟のふしぎな冒険』その他がすでに訳されている。作者はまた大旅行家で、日本に来て一年ほど滞在したことがあり、その紀行『*Nomi und Japan* ノンニと日本』を出しているが、これは未訳。（山室 静）

杉浦非水 すきうら ひすい

杉浦明平 すきうら みんぺい 一九一三（大2）小説家、文芸評論家。愛知県渥美郡福江町（現渥美町）に生まれ、一九三六年東京帝国大学国文学科卒業。在学中に土屋文明に師事、アララギ派の短歌に熱中。卒業後、日本出版社などに勤め、ルネッサンスの研究を進め『ルネッ

サンス文学の研究』（一九六六）にまとめる。五〇年帰郷、町会議員を二期八年間行う。『ノリソダ騒動記』（五三）、『基地六〇五号』（五四）など一連の記録文学を発表。ほかに、ロダリーの『チポリーノの冒険』『青矢号のぼうけん』、*レツジャーニの『犬と五人の子どもたち』など児童文学関係の翻訳がある。雑誌『文学』に発表した小川未明の文学を全面的に否定した『小川未明論』（六一）もある。また、郷土にかかわる人物として『小説渡辺華山』（七一）をまとめ、注目される。郷土の若い作家の支柱となつて活躍している。（大石源三）

杉谷代水 すぎたに たいすい 一八七四—一九一五（明7—大4）

詩人、劇作家、小説家、編集者。本名虎造。島根県境港市に生まれ、高等小学校教員を経て、東京専門学校文学科（現早稲田大学）に入学。病氣中退ののち、一八九八年富山房に入社し、坪内雄蔵（逍遙）編の尋常小学校用・高等小学校用『国語読本』の制作に携わった。当時は、国定化される以前で多種の教科書が刊行されていたが、この国語教科書は、独自の編集方針がかわれて、多くの学校で採用された。教科書編集と同時期、盛んに新体詩をつくり『わかれの春』『海賊』『夕しほ』などを発表、唱歌『星の界』『古武士』『如意』などもつくった。児童書では『学童日誌』（一九〇二）『デアミーチス』『クオレ』の初訳）、『希臘神話』（一九〇九）、『アラビヤンナイト』（一五）などの翻訳・編著がある。歌劇・戯曲・

狂言も書いた。歿後に『杉谷代水選集』(三五)が刊行されている。
(江森隆子)

杉田 豊 ゆきた たか 一九三〇(昭五) 画家、絵本作家。埼玉県大宮市生まれ。一九五三年東京教育大学教育学部芸術学科卒業後、グラフィックデザイナーとして活躍、五七年日宣美奨励賞受賞。武市八十雄の勧めで六五年『みんなのおねがい』を発表後、『ねずみのごちそう』(七八)、『うれしいひ』(七九)、『ほくのかお』(八六)など多くの絵本を手がける。内外の評価も高く、各種の賞を受賞。外国版多数。七八年より筑波大学芸術学系教授。

杉みき子 すぎき こ 一九三〇(昭五) 児童文学作家。本名小寺佐和子。新潟県高田市に生まれ、小川未明の出た大手町小学校に通う。長野女子専門学校国語科卒。一九五四年から「新潟日報」が常時募集掲載した『お母さんの童話』に投稿、入選の常連として選者関英雄に見いだされる。「日本児童文学」に発表の短編『かくまきの歌』『百ワットの星』ほかで、五七年に日本児童文学者協会新人賞を受賞。六六年に短編集『雪の下のうた』を処女出版。以後短編集『かくまきの歌』(一九七〇)、中編『さよならを言わないで』(七一)、短編集『小さな雪の町の物語』(七一 小学館文学賞受賞)、詩画集『風によそおい』(七五)、短編集『白いとんねる』(七七)、『白いやねから歌がきこえる』(八〇)、短編集

『小さな町の風景』(八一 赤い鳥文学賞受賞)その他の著書あり、幼年童話、随筆の著もある。新潟の歌誌『北潮』の同人で短歌の作も多い。出世作『かくまきの歌』は雪国の風土の情感豊かに、郷土に生きる祖母から孫まで親子三代の生活を、庶民の哀歎の心で描いた佳作。以来、杉は一貫して生い立ちの郷土の人と風物を手堅い生活者の目と、繊細な散文詩人の感覚で描いてきている。前記受賞の二著はその代表作。杉の作風は散文詩的短編の中に北の風土が生んだイマジネーションを盛るところ、杉が敬愛する郷土の先輩小川未明の童話に一脈通うが、基底のリアリズムと性格的な楽天性は未明と異なる。
(関 英雄)

スキヤリー スキャリー **リチャード** Richard Scarry 一九一九(一) アメリカの絵本作家、挿絵画家。第二次大戦後より活動をはじめ、その作品世界は日常生活にみられる事象を明解な様式で詳細に描写する点に特徴がある。数多い作品の中でも、『Tinker and Tanker』(一)『かけ屋とタンク車』(一九六〇)にほめる『Tinker and Tanker』シリーズがとくに知られる。そのほか『Best Nursery Rhymes Ever』(一)『すぐれたわらべ唄』(六四)などのように、わらべ唄や昔話を紹介した著作物も多い。
(定松 正)

周郷 ひろこう 一九〇七(一八) 教育学者。千葉県に小学校校長の長男として生まれる。一九

三三年、東京帝国大学文学部教育学科卒業。日本少年文化協会附属少年文化研究所主任を務め、戦後は国民図書刊行会の雑誌「少年世界」、季刊「新児童文化」(ともに一九四六 創刊)の編集長、お茶の水女子大学教授、同附属幼稚園長を歴任。学生時代から雑誌「赤い鳥」に童話を投稿して入選するなど、詩人肌の学者として知られる。教育社会学を専攻、幼児教育や芸術教育に関心深く、著書、訳書も多い。主著に『教育社会学』(五二)、『幼児の芸術』(五八)、詩集『失われた季節を求めて』(七三)、訳書に、A・トリス『乳児及び幼児の教育』(五〇)、H・リード『平和のための教育』(五二)など。ほかに『教育の周郷博著作集』全六巻・別巻一(八〇〜八二)がある。(長戸優子)

菅生 浩 (ひろし) 一九三八(昭13) 児童文学作家。福島県郡山市に生まれ、安積高校卒業。さまざまな職業に携わりながら創作に励み、郷里の郡山を舞台に戦後世代の中学生の成長を描いた『巣立つ日まで』(一九七四)で日本児童文学者協会新人賞を受賞。一九八〇〜八二年にかけて、同じく郡山を舞台に『子守学校』『子守学校の女先生』『さいなら子守学校』の三部作を書き、埋もれていた民衆の教育の歴史に光を当てた。(砂田 弘)

スコット ウォルター Walter Scott 一七七一—一八三二 スコットランドの詩人、歴史小説家、弁護士。

子どもの本としては、晩年、孫のために書いたスコットランドとフランスの歴史書『*Tales of a Grandfather* おじいさんの語る歴史』(一八二七—三〇)一冊だけであるが、『歴史小説』というジャンルの創始者としてのちの児童文学の中の歴史物語に多大な影響を与え、また、『歴史冒険小説』というスケールの大きい物語づくりにも関連をもった。一九世紀末から、子ども向きに再話された版で、人気作家の一人となり、日本にも明治初年には翻訳紹介されている。スコットは、まずスコットランド辺境地方の古い伝説やバラードの収集に興味をもち、一八〇二—三年にかけて、『*Border Minstrelsy* 辺境地方の民謡集』三巻をまとめた。一二年アボッツフォードに居を定めてから散文物語に転じ、一四年『*Waverley* ウェイバリー』を出版以来、「ウェイバリー小説集」と総称される歴史小説群を発表し続けた。『*Guy Raverley* ガイ・マナリング大佐』(一五)、『*Rob Roy* ロブ・ロイ』(一七)など。四〇年準男爵に叙せられている。スコットの小説の特長は歴史を背景として広範な社会相を描き出し、多種多様な人物を躍動させるところにある。ルカーチの『歴史小説論』によると、スコットは、国民の大多数は月並みで平凡であり、いつでも二つの陣営の間において揺れ動いているという視座から作品を書いた点が革新であったとされている。最も人気の高い作品『アイヴァンホー』(二

○)では、ユダヤ人アイザックと娘レベッカを中心人物にすえ、土着のサクソン人と征服者のノルマン人の対立を描いている。時の王リチャードは武術に優れ、人望も厚いにもかかわらず十字軍に加わって行方不明になってしまふ。王位をねらう弟ジョンが開いた馬上槍試合に現れ、ジョンの騎士軍を破ったのがリチャードとアイヴァンホーであり、二人は協力しジョンを倒し、すべての人が獅子王リチャードに忠節を誓うというプロットは中世騎士道物語そのものであるが、歴史的に正確でない点を指摘されながら長く読み継がれているのは、アイヴァンホーの活躍をいわば複眼で描き出したところにあるかと思われる。(三宅興子)

スース ドクター Dr. Süss 一九〇四、アメリカの絵本作家。本名セオドワ・スース・ガイセル。雑誌や広告の漫画を手がけた後、『マルベリー通りのふしぎなできごと』(一九三七)を手はじめに、『ふしぎな500のぼうし』(三八)など、奇想とユーモアに富む絵本を創作。読み書きをはじめたころの子ども向きに、一九五七年から相ついで出版されたシリーズものでもよく知られる。

鈴木御水 ぎすずい 一八九八(明31) 挿絵画家

家。本名一郎。秋田市に生まれ、陸軍所沢飛行学校を卒業。日本画を塚原霊山、伊東深水に師事した。密林、海洋、軍事小説の挿絵に筆を執り、代表作に池田宣政

『巨象 森の王と闘ふ』(一九三一)、『密林の王者』(三二)、『海洋冒険物語』(三三)、以上「少年倶楽部」、講談社の絵本『万次郎漂流記』(五五)などがあり、また空中戦の口絵を得意とし「飛行機の御水」と異名をとった。

(渡辺圭二)

鈴木喜代春 きよはる 一九二五(大14) 児童文学作家。青森県南津軽郡田舎館村に生まれる。青森師範卒業後、同県黒石市内で教鞭を執る。黒石小学校在職中、生活綴方運動を實踐、一九五二年小学校四年生の生活記録をまとめた文集『みつばちの子』を刊行する。のち、千葉県内の小・中学校に勤務、松戸市小金小学校校長で退職。*日本子どもの本研究会理事。青森県児童文学研究会名誉会員。著書の『北風の子』(一九六二)は、黒石小在勤中、社会科で学習した水田単作地帯の、厳しい現実にも負けず、たくましく生きていくて欲しいと念願して、学級文集に連載したものをまとめた作品である。ほかに『北海の道』(六六)、『二つの川』(七一)や郷土青森を題材とした『一郎地蔵』(八〇)、『十三湖のばば』(七四)、『飢餓の大地』(七七)、『津軽ボサマの旅三味線』(八五)、『北の海の白い十字架』(八五)など多数あるが、鈴木作品には『北風の子』を書かせた教育者としての悲願が底に流れている。

(北 彰介)

鈴木 淳 すずき

者、出版人。静岡県生まれ。一九〇四（明37）編集時の小学館に入社。二九年独立して人文書房、新生閣を経営。フタバ書院編集時代の四一年には、小川未明ら多くの童話集を刊行。戦後再建した新生閣から、「少女ライフ」など数種の児童向け雑誌を発行。五三年古巣の小学館出版部長に迎えられ、六一年集英社に転出し、副社長を最後に七四年に現役を退き、現在顧問。著書に『日本の出版界を築いた人びと』（八五）ほかがある。

（五十嵐康夫）

鈴木善太郎 一八八四—一九五一（明17—昭26）

翻訳家、小説家。福島県に生まれ。早稲田大学英文科卒。国民新聞社、朝日新聞社の記者を経て、翻訳家・小説家として活躍。小説では『山荘の人々』（一九二二）

が主著。ハンガリーの劇作家モルナールを熱心に紹介し、『リリオム』は岩波文庫に収められて著名。大正期には雑誌「金の星」その他に童話や童話劇を執筆、長編少女小説に『たんぼの家』（二二）、童話集に『迷ひ子の家鴨』（二〇）などがある。

鈴木 隆 一九一九—（大8） 児童文学

作家。岡山県に生まれる。早稲田大学文学部独文科卒。坪田譲治に師事して童話を書く。長編に『マツチのバイオリン』（一九六一）、『忍術八郎ざの冒険』（六四）、『はらまき大砲』（八六）があり、童話集『はやかこ次郎助』（六五）などがある。独自のユーモアと抒情をうたい込んだ作風だが、代表作の長編小説『けんかえれじい』（六七）では、それに一段と磨きがかけられ、日本の青春文学の秀作となっている。

薄田 泣菫 一八七七一—一九四五（明10—昭20）

詩人、随筆家。本名淳介、岡山県倉敷市に生まれ、岡山県尋常中学校中退。キーツやワーズワースを熱愛し、二〇歳前後から作詩をはじめ、ヨーロッパのソネット詩型を試みた。『暮笛集』（一八九九）で詩名を高め、『ゆく春』（一九〇二）、『二十五絃』（〇五）、『白玉姫』（〇五）『白羊宮』（〇六）などの詩集を出版。一九二二年大阪毎日新聞社に入社、学芸・文化に健筆を振るい、随筆集八冊を刊行。知的で感情豊かな性情は、児童文学にも関心を寄せ、明治末からロゼッティの『Sing-Song』

ング・ソング」に影響を受けた素朴な美感の漂う『子守唄』を詩雑誌に発表した。児童文学的作品に『子守唄』(二七)、『お伽噺とお伽唄』(一七)、『童話と詩・蜘蛛と蝶』(四二)、『童話集・猿の魚釣』(四七)がある。彼の『子守唄』『お伽噺とお伽唄』は、我が童話史上芸術的創作童謡の先駆として注目すべき意義をもっている。

鈴木徹郎

てつろう 一九二二—(大11—) 北欧文学

学研究者、アンデルセン研究者、日本アンデルセン協会事務局長。長野県生まれ。コペンハーゲン大学大学院に留学。アンデルセンの作品の翻訳、研究に従事。アンデルセンの童話作家としての側面ばかりでなく、全体的実像の紹介に努める。主な著作に『ハンス・クリスチャン・アンデルセン—その虚像と実像』(一九七九)、訳業に『アンデルセン小説—紀行文学全集』全一〇巻(八六—八七)などがある。

鈴木寿雄

すずき としお 一九〇四—七五(明37—昭50) 童画家

家。東京浅草に生まれ、長兄鈴木朱雀(日本画家)の影響もあって画家を志し、一九二九年ごろより児童出版物に童画を描く。子どもなどの象徴的表現に優れて活躍。四六年日本童画会創立に参加、五五年ごろには黒崎義介、林義雄と並んで最も人気の高い童画家となった。童画会解散後は日本童画家協会同人として作品発表。代表作に昭和一〇年代に出版された『ミコチャンナコ

チャン』、また『げんこつやまのあかおに』(一九七八)など多数。小学館絵画賞受賞。童画家の鈴木未央子は長女。(久保雅勇)

スズキヘキ

一八九九—一九七三(明32—昭48) 童

謡詩人。本名鈴木栄吉、当初の筆名は錫木碧。仙台市に生まれ一九一四年高等小学校卒業、銀行員となる。一八年ごろより童謡に関心を抱き、主に「おとぎの世界」へ投稿。二一年天江富弥と童謡専門同人誌「おてんとさん」を発行、郷土童謡運動を起す。自らも路傍で歌う。童心賛美と日本的無常感とをない合わせたような心境を仙台方言を混じえて表現し、二七ごろからは片かな表記に徹した。戦後JOHK「東北うたのほん」で活躍。『スズキヘキ童謡集』(一九七五)がある。童謡作曲家、鈴木幸四郎は弟。(遠藤 実)

鈴木三重吉

みそきち 一八八一—一九三六(明15—昭11) 小説家

童話作家、雑誌編集発行。広島市猿楽町に生まれる。京都第三高等学校を経て東京帝国大学英文科卒業。東京帝大在学中、夏目漱石の講義を受け、私淑。処女作『千鳥』を漱石に献じたのは、まだ東京帝大二年生の時であった。漱石は早速「僕名作を得たり」と「ホトトギス」に推薦。以後、『山彦』、『おみつさん』などの诗情に富んだ短編を続いて発表、文壇の人気作家となった。大学卒業後、成田中学校の教頭として赴任。教育のかたわら、『小猫』『小鳥の巣』などの自然

主義の影響を受けた作品を世に送った。一九一一年、学生のストライキが起こり、中学校を辞し上京、作家生活に専念する。『赤い鳥』『金魚』『穴』『桑の実』『八の馬鹿』などを次々に発表した。一四年ごろから、創作の筆はしだいに進まなくなり、三重吉の関心は出版活動に移っていった。夏目漱石の『倫敦塔』をはじめとする現代作家の代表作集を『現代名作集』として二〇編刊行し、かたわら、自己のこれまでの創作を網羅する全一三巻の『三重吉全集』を出版したのは一五年であった。そして翌年、全集の完了後、三重吉が手がけたのが、子どものための文学であった。『湖水の女』（一九一六）は、文字通り西洋昔話の再話であった、三重吉の創作ではない。当時は巖谷小波の『世界お伽噺』『世界お伽文庫』が一世を風靡していたのだが、三重吉は、小波流の口演口調の文体を卑俗として退け、真実を写す文章を子どもの文学においても開拓したいと思ったのである。こうして子どもの文学にしたいに深入りしていった三重吉は、『世界童話集』を続刊するかたわら、子どものための芸術としての童話と童謡を開拓する運動を展開すべく、児童文芸誌『赤い鳥』（二八創刊）を自ら主宰発行することを思い立った。三重吉は精力的に文壇の作家詩人たちに呼びかけた。芥川龍之介、有島武郎、宇野浩二、小川未明、菊池寛、佐藤春夫、島崎藤村、豊島与志雄などの今日に残る童

話の傑作が生まれると同時に、北原白秋、泉鏡花、三木露風、西条八十など詩人による童謡が、「赤い鳥」を機縁に開花したのであった。こうして、明治のお伽噺と唱歌の時代から、大正の童話と童謡の時代へと変貌させる契機となったのが「赤い鳥」であったが、三重吉はさらに、山田耕筰、近衛秀麿、成田為三などの作曲による童謡曲譜、久保田万太郎による少年少女劇、清水良雄、深沢省三などによる童画の開拓も「赤い鳥」誌上で展開した。さらに注目すべきは「赤い鳥」の投稿欄によって、子どもの綴方、自由詩、自由画を一変させたことである。綴方は三重吉自身が担当し、自由詩は白秋、自由画は山本鼎が担当した。経営難から「赤い鳥」は一時休刊（一九一九）したが、三一年復刊し、その後は会員制を採り、三六年の三重吉の死まで続刊した。『ぼっぼのお手帳』（一九一八）、『古事記物語』（二〇〇）、『綴方読本』（四八）、『世界童話』（一七・二六）などが、子どものための代表的著作である。

「ぼっぼのお手帳」が「赤い鳥」創刊号に載った短編童話。再話の多い三重吉童話の中では珍しい創作である。ぼっぼは鳩のことで、主人公の女の子の名はずちやんである。三重吉の長女の名はずちやんであり一九一六年に生まれている。その長女はずちやんが生まれて、ぼっぼの籠につかまり立ちをし、初めて「ぼっぼ」と言うようになる、その間の家族の歴史を、淡々と、し

かも温く、美しい口語文でまとめたもの。

【参考文献】桑原三郎『赤い鳥の時代』（一九七五 慶応通信）、桑原三郎『鈴木三重吉解説』（一九七八 『日本児童文学大系10』 ほんぶ出版）（桑原三郎）

鈴木 実 みずき 一九三二（昭七） 児童文学

作家。山形県に生まれ、早稲田大学政経学部に進み、早大童話会に入会。卒業後、山形大学教育学部に編入学。山形市の中学校教師となり現在に至る。早くから地域に根ざした児童文学の創造に取り組み、山形童話の会「もんぺの子」を須藤克三を中心に発刊、米軍基地を背景にした共同創作『山が泣いている』（一九六〇）で第一回日本児童文学者協会賞を受賞。ほかに、『オイノコは夜明けにほえる』など。（砂田 弘）

鈴木義治 よじはる 一九一三（大二） 絵本画家。

横浜市に生まれ、川端画学校卒業。現代童画会委員。絵本の絵に、『小さな小さなキツネ』（一九七三）、『一つの花』（七五）、『つりばしわたれ』（七六）、『そばうちばば』（八四）、『ハンカチの女の子』（八五）。挿絵などに、『うさぎの夏』（七三）、『コタンの口笛』（七六）。落ちついた中間色で描き、とくに、黄色と緑色の使い方に独特のムードが感じられる。サンケイ児童出版文化賞など受賞。（井上共子）

スタイク ウィリアム William Steig 一九〇七

アメリカの児童文学作家、画家。雑誌に挿絵を描いて

いたが、『ぶたのめいかしゅロランド』（一九六八）で絵本界に入る。『ロバのシルベスターとまほうのこいし』（六九 コールデコット賞）、『ぼしやでおつかいに』（七四）、『ものいうほね』（七六）などでは、ストーリーが刻々と変化し、ドラマティックな展開をみせる。昔話のヴァリエーションもあり、漫画風の絵のタッチで親しみやすく、全体にユーモアが流れる。そのほか、『アベルの島』（七六）などの幼年童話もある。（原 昌）

須知徳平 とくへい 一九二一（大10） 小説家。本名佐川茂。岩手県紫波町生まれ、盛岡中学卒業後中国に渡り帰国、折口信夫に惹かれ国学院大学卒業。郷里と北海道で中学、高校の教師を経て作家を志し上京。長編少年少女小説『ミルナの座敷』（一九六一 講談社児童文学新人賞）、『春来る鬼』（六三）で第一回吉川英治賞の栄を受け、ラジオドラマなどにも広く活躍。『アツカの斜塔』『人形は見ていた』など少年少女推理長編で新風を呼ぶほか民話風な作も多い。（西沢正太郎）

ステイヴンソン ロバート・L Robert Louis Stevenson 一八五〇〜九四 イギリスの作家、詩人、紀行文家。エジンバラで裕福な灯台建築技師の一人息子として生まれる。母親が病身だったため、主として乳母に育てられるが、彼自身も肺を病んでいて寝苦しい夜を過ごすことが多く、乳母や父親から数多く聞かされた物語は、空想によって退屈を紛らす助けとなり、

また、熱のある時などは悪夢の種ともなった。これには厳しい宗教教育によつて植えつけられた罪悪感も関係していたようである。一家はこの時期、転地療養と父の仕事のために海辺などへしばしば出かけ、その見聞がのちの作品の母体となると同時に、将来旅行家となる素地をもつてきた。大学でははじめ父の希望で工学を学ぶが、たいして興味もあつて、恵まれた境遇に對する反発もあつて、前衛気取りの奇矯な服装で酒場などに入り浸つて過ごし、結局、法律を勉強するといふ条件で本来の希望だつた文筆の道に進むことを認めよう。このころからドイツやフランスへ放浪の旅に出るようになった彼は、その旅行記である『旅は驢馬をつれて』（一八七九）などによつてまず認められるが、彼の好んだ徒歩旅行やカヌーの旅は弱い身体には適当とはいえなかつた。やがて夫のある一〇歳年上のアメリカ女性ファニーと出会つて恋におちた彼は、さまざまな障害を克服して結婚にこぎつけるが、そのためにカリフォルニアまで極端な貧乏旅行をし、病気をこじらせて死にかけたりもした。

代表作、『宝島』は、結婚後スコットランドで過ごしていた時、ファニーの連れ子ロイドと一緒に描いた地図からたちまちのうちに生まれ、「青少年」誌に連載されたのち、一八八三年に本になつて絶大な人気を博した。彼自身は冒険作家になるつもりはなかつたといわ

れるが、このあと『さらわれたデーウイド』（八六）、『The Black Arrow 黒い矢』（八八）、『The Master of Ballantrae バラントレーの若殿』（八九）などの冒険歴史小説を次々に発表し、流行作家の地位と経済的なゆとりを手にした。そのほかの代表作には、二重人格を題材とした怪奇小説『ジキル博士とハイド氏』（八六）があるが、そうした世紀末好みの幻想や血生臭い冒険小説と並行して、軽やかで繊細な子どもの世界をうたつた詩集『子どもの詩の園』（八五）が発表されているのは興味深い。身体によい土地を求めて転地を繰り返した彼は、アメリカを経て南太平洋のサモアに落ち着き、土地の人々にツシタラ（物語の名人の意と呼ばれて親しまれるが、やつと執筆に専念できるようになつたのもつかの間、四四歳の誕生日を前にして世を去つた。しかし、そうした一種ロマンティックな生涯は、それ自体人気の的となり、死後もサモアからの手紙を集めた『Valima Letters ウアイリマ便り』（九五）などが広く愛読された。

『宝島』^{たが}。Treasure Island 一八八三年。冒険小説。主人公のジム少年は、海賊フリント船長が宝を隠した島の地図を手に入れ、船を仕立ててそれを捜しに行く紳士たちの一行に加わるが、実は料理番のジョン・シルヴァー以下、加わつた水夫の大半が海賊で、島につくとすぐ血で血を洗う戦いはじまる。オウムを連れ

た一本脚の海賊シルヴァーは、単なる悪役を超えた独特の風格をもった人物として生き生きと描かれ、その後の少年文学や海賊ごっこに大きな影響を与えた。

「さらわれたデーヴィッド」 *Kidnapped* 一八八六年。

冒険歴史小説。孤児になった主人公デーヴィッドは、本当は彼のものである財産を横領していた叔父にだまされ、誘拐されて奴隷に売られそうになるが、船が難破してスコットランドの海岸に打ちあげられる。しかし、途中で知り会ったアラン・ブレックという男が、当時のイギリスを真二つにしていた政争の関係者であったため、歴史的な暗殺事件に巻き込まれて、アランとともにお尋ね者としてヒースの荒野を逃げまわるはめになる。

(脇明子)

ステエーフ ウラジミール・Г Владимир Гуров

Владимир Гуров 一九〇三— ソビエトの絵本作家。

モスクワ生まれ。国立映画大学舞台装置科を卒業。*

アニメーションの創始者として活躍した後、一九四〇年代半ばから絵本のイラストをはじめた。初の創作絵本『えんぴつとえのくのふたつのお話』(一九五二)の成功以来、動きのある楽しい絵本を次々に発表。日本でも『ニヤーンといったのはだれ?』(五四)、絵本の傑作集『いねずみとえんぴつ』(六六)などが出版されている。

(松谷さやか)

ストー キャサリン Catharine Storr 一九二二—

イギリスの児童文学作家、小説家、精神分析学者。幼年読者向きに『りこうなポリーとまぬけなおおかみ』(一九五二)に代表されるシリーズがあるが、子どもの心理を探る心理ファンタジーともいえるべき異色の作品に『マリアンヌの夢』(五八)や『Rufus ルーファス』(六九)がある。子どもの現実を扱ったものにも『海の休暇』(六〇)のように心理的なものが多い。(猪熊葉子)

ストウ ハリエット・B Harriet Beecher Stowe

一八一—一九六 アメリカの小説家。神学者の娘として生まれ、教師を経て、牧師と結婚後は、故郷ニューヨークランドの歴史や生活に基づく『牧師の求婚』(二八五九)や『懐しい町の人々』(六九)などを著すが、何よりも『トムじいやの小屋』(五二)で知られている。この作品は奴隷制廃止を主張する雑誌に連載されて以来、大評判を得て奴隷解放のための南北戦争の気運を促した。ストウはこの作品を子ども向きに書き直してもいる。どんな迫害にあっても、愛と信仰と忍耐を失わない主人公の黒人奴隷トムの姿は感動的である。しかし、白人に対するトムのあまりに寛容な忍従の姿は、白人にとって都合のよい黒人像を提示するものであり、重い社会問題、社会悪を、感傷に流す傾向があるという評もある。ほかに、『小さなブッシー・ウイロー』(七〇)という田舎の少女と町の少女の対照を描いた少女小説も人気を得る。

(藤森かよこ)

須藤克三

かつぞう

一九〇六―八二(明39―昭57) 童話

作家、評論家。山形県東置賜郡宮内(現南陽市宮内)に生まれ山形師範を経て日本大学高師部卒業。小学校教師、教育雑誌編集者を務める。そのころより生田蝶介主宰

『吾妹』同人となり、歌集『流蔭』を出版(一九三二)。

教員生活から取材し『らくがき教案簿』(四〇)、『全用学校劇珠玉集』(三八)など数冊の学校劇集も出版し、子どもたちの演劇活動に強い影響を与えた。戦災(四五)に

遭い帰郷し山形新聞論説委員、文化部長となる。戦後の山形の児童文化・農村文化・生活綴方運動などに活躍、無着成恭の『山びこ学校』誕生の産婆役をも果たした。一九五一年には山形県児童文化研究会、五四年

には山形童話の会を設立、地方児童文化の発展に尽くした。児童文学にかかわる著書には、『出かせぎ村のゾロ』(六八)、『友情とつげき隊』(七〇)、『出かせぎ村のゾロ』(七二)、『出かせぎ村の忍者たち』(七八)などがあるが、いずれも東北農村の出かせぎ問題を人道主義的な立場で描いている。

ストップズ ウィリアム William Stobbs 一九一四

イギリスの挿絵画家。ダラム大学で美術史を専攻。美術学校やデザイン学校などの校長を務める。一九五〇年代に登場。五九年にチェーホフの小品『カシタンカ』と『バラッドの束』の二作の挿絵でケイト・グリー

ナウェー賞受賞。白黒画、赤黒のハーフトーン画、多

色画を使い分け、R・ウェルチの『Knight Crusaders

夜の十字軍戦士』など多数の作家の作品に挿絵を描くほか、『三匹のくま』など独自の昔話絵本も多数制作している。

ストラパローラ ジョヴァン フランチェスコ

Giovan Francesco Straparola 一四八〇―一五五七(推定) イタリアの作家。歌謡詩人(カンタストリーエ)であったともいわれる。晩年の作『Le piacevoli notti』の『しい夜』(一五五〇―五二)が一九世紀末以来、ヨーロッパ最古の民話集として見直され、研究者の注目を浴びるようになった。デカメロン風の枠物語の中に『緑の小鳥』『手なし娘』など口承話からの再話と思われるものと、ラテン語の説話集からの翻訳併せて七五話を収める。

ストリー story 作品の中の事件であり、素材を物語る中心的ドラマで、筋立てを文章によって表現したもの。小説も童話もストリーの巧みさが読者を惹きつけることになる。いかにテマが大きくても物語的興味が弱いと内容が乏しく、読者の関心を失う。ただし通俗的ストリーの面白さだけでは文学的感動とは成り難い。作者の感興のみから生まれる童話より、子どもの社会的、人間的興味を豊かにできるストリーが要求される。

ストリーテリング story telling お話を語り

き (西本鶏介)

かせること。語りの文化は古来、どの民族にもあったが、英米の図書館では二〇世紀はじめより、子どもと本を結びつける一つの方法として語りを取り入れるようになった。日本では一九六〇年代にアメリカで児童図書館学を学んできた人たちが、児童奉仕の一環としてのストーリーテリングを紹介したことから徐々に関心が高まり、現在多くの公共図書館、家庭文庫、児童館などでお話が語られている。

(根岸貴子)

ストリンドベリ アウグスト August Strindberg
一八四九—一九二二 スウェーデンの劇作家、小説家。

自然主義、表現主義の旗手として、小説、戯曲、詩など多彩な作品を残し、スウェーデン文学の第一人者として今日も高く評価されている。我が国では、新劇運動の中で繰り返し上演されている戯曲『父』(一八八七)、『令嬢ジュリー』(一八八)の作者として知られる。童話や童話劇の作品もあり、童話『海に落ちたピアノ』(一九〇三)や童話劇『白鳥姫』『アブ・カゼムの靴』『ペアーの旅』『冠の花嫁』(二五)、『世界童話大系』第一九巻、童話劇編(一)、小山内薫訳)、『天国の鍵』(三〇)、『世界童話劇集』上巻、小山内薫訳)など邦訳されている作品も多い。

(柳沢重也・富田博之)

ストレットフィールド ノール Noel Streetfield
一八九五—一九八六 イギリスの児童文学作家。最初女優であったがのちに小説を書くようになり、児童文学

作家になる。ほかに劇やバレーや歴史の本を書いたり、雑誌の編集を担当したり幅広い活動をしている。『バレー・シューズ』(一九三六)はバレーリーナになる少女の物語で、一般に職業を身につけて成長していく若い人たちの世界を扱っている。『サーカスがやってくる』(三八)でカーネギー賞を受賞。

(天飼和雄)

砂田 弘 ひろしな 一九三三—(昭八) 児童文学作家。朝鮮南部(現韓国)の浦項で生まれ、幼少年期をソウル、仁川で過ごす。敗戦後、父の郷里の山口県に引き揚げ、中国地方と九州中で中・高校時代を送り、早稲田大学仏文科在学中には早大童話会に所属した。卒業後一時出版社に勤務し、一九五九年には短編小説『二つのボール』が「サンデー毎日」大衆文芸に当選したが、六二年以降は児童文学の創作や評論、ノンフィクションなど、子どもを中心にした文筆活動に専念するようになった。なお、千葉大学講師、山口女子大学教授(一九八一—八四)などを歴任して、児童文学や児童文化を講じる経歴も長い。東京のドヤ街を主要な舞台に、スリの少年を主人公とした『東京のサンタクロース』(六一)でデビューし、炭鉱災害を背景として少女の成長を描いた『道子の朝』(六八)、事故を起こした青年の怒りを通して欠陥車問題につき、日本児童文学者協会賞を受賞した『さらばハイウェイ』(七〇)と、スケールの大きいダイナミックな作品で社会問題を鋭く告発

し、社会派としての定評を確立した。その後は、『六年生のカレンダー』(七三)、『二死満塁』(七七)、『トランプ物語』(八二)など、子どももの日常を温かく軽快に捉えるものが多くなっているが、その日常性の中にある社会問題を追究する姿勢に変わりはない。(長谷川潮)

スバルウィン エウゲーニ・T Бречий Тендикovich Спальин

スピア エリザベス・G Elizabeth George Speare
一九〇八、アメリカの児童文学作家。高校の英語教師を経て、子ども向きであると同時にその枠を超えた質の高い歴史小説を著す。独立直前のアメリカを舞台に、開放的な少女が清教徒から受ける魔女裁判を題材にした『からすが池の魔女』(一九五八)でニューベリー賞を受賞。帝政ローマを背景にユダヤ人青年の神への帰依を描いた『青銅の弓』(六一)で、再びニューベリー

賞を受ける。

(藤森かよ)

スピア ピーター Peter Spier 一九二七、オランダ生まれの挿絵画家。オランダで教育を受け、兵役にもついた。現在、ニューヨークに住む。作品は大変創意に満ち、日本での人気も高い。自作の、動物の鳴き声を集めてある『ゴロウーウーウーブーパー』(一九七一)の絵本のほかに、『ロンドン橋が落ちます』(六七)など、数多くの挿絵も描いている。『リーダーズダイジェスト』、『タイム』、『ライフ』誌にも寄稿している。(橋本圭好子)

スペリ アームストロング Armstrong Sperry 一八九七〜一九七六、アメリカの作家、挿絵画家。画を学び、商業美術、イラストレーターとしても活躍。民族学を専攻し、南海の知識を豊富に学んだ。ニューベリー賞受賞の『海をおそれる少年』(一九四〇)は、ポリネシアの少年の勇気と成長を骨太に描いたもので伝説風を装う。ほか『All Sail Set 出帆』(三六)や『The Rain Forest レイン・フォレスト』(四七)など海と男の物語が大半で、若者向けの作品は二〇を超える。(島 式子)

スベン オットー Svend Otto S. (Sørensen) 一九一六、デンマークの画家、絵本作家。児童書ばかりでなく、教科書、小説の挿絵、装丁など、あらゆる分野を手がける。デッサン力のある落ち着いた画風を生かし、民話やアンデルセン童話の挿絵の仕事が多い。

一九七八年、国際アンデルセン賞を受賞。以後は主としてオリジナル絵本に力を注ぐ。代表作に『ティムとトリーネ』（一九七六）、『クリスマススの絵本』（七八）。

（木村由利子）

スペンズ エリナー Eleanor Spence 一九二八—
オーストラリアの児童文学作家。社会問題を多く扱い、『*The Green Laurel* 緑の月桂樹』（一九六三）では移民と貧困を、『*The October Child* 十月の子供』（七六）では自閉症児を抱えた家族の悩み、『*The Left Overs* 残りもの』（八二）では親の離婚が引き起こす問題を扱っている。また、『*The Seventh Pebble* 七つ目の小石』（八〇）はカトリックの一家に対する田舎の人々の偏見と差別が子どもの目を通して描かれている。

（牟田おりえ）

住井すゑ すゑ 一九〇二—（明35—）小説家、児童文学作家。本姓大田。奈良県平野村（現田原本町）に生まれる。田原本女子技芸学校を卒業して、一九一九年上京、講談社に入社、編集者となる。同年犬田卯と結婚。二一年『相剋』を上梓、農民文学への指針を定めた。三〇年無産婦人芸術連盟に参加し、「婦人戦線」で理論家としても活躍、女性解放の旗手となった。『大地にひらく』（一九三〇）、『村の浮浪者』（三二）を発表。このころから児童文学作品も執筆している。その後しばらく夫の看病と育児に追われるが、やがて『農婦譚』

（三九）、『土の女たち』（四一）を経て、農村生活を克明に描いた『大地の倫理』（四三）を刊行。戦後は児童文学で活動を開始、「小学五年生」に掲載の『みかん』（五二）は第一回小学館文学賞を受賞、続いて『夜あけ朝あけ』（五四）は第八回毎日出版文化賞を受賞した。農村の矛盾にメスを入れ、貧しさを克服して生きる少年を描いたこの作品は、映画や劇（民芸）になり、人々の感動を呼んだ。再び小説の筆を執り、『向い風』（五三）を経て、大作『橋のない川』六部（六一—七三）を完成する。夫の遺骨を納めたその足で部落解放同盟を訪れ、運動に参加したいと申し出て「部落」に第一部が連載されることになったという。そのほか、夫との愛の記録『愛といのち』（五七）、随筆集『牛久沼のほとり』（八三）、『住井すゑとの絵本集』一—五（八二、八三）がある。現在自宅を開放して「抱撲舎」公開学習会を主催。（深川明子）

スミス リリアン H Lillian H. Smith 一八八七—一九八三 カナダの児童図書館員、児童文学者。オンタリオ州に生まれる。トロント大学、米国のピッツバーグの児童図書館員養成学校を経て、一九一二年、トロント公共図書館の初代児童図書館員となる。そこで基本的良書を整理すると、ストーリーテリング、ブックトークを取り入れ活発な図書館活動を開始し、内外の注目を集めた。児童文学の啓蒙活動、後輩の指導、トロント大学で児童文学の講義など幅広い活動もした。英国

のE・オズボーンは、女史の活動に感動、その児童書コレクションをトロント公共図書館に寄贈した。児童文学研究者の必読書となっている女史の『児童文学論』(一九五三)は、古典の重要さを繰り返し述べ、児童文学も大人の文学と同じ基準で批評しようとしている。

(桂 育子)

スロボトキン ルイス Louis Slobodkin 一九〇三—
 七五 アメリカの作家、挿絵画家。はじめは彫刻家だったが、エステスの『モファットきょうだい』(一九四二)の挿絵を手がけたのをきっかけに、子どもの本の仕事に転じる。挿絵の代表作にサーバーの『たくさんのお月さま』(四三)、エステスの『百まいのきもの』(四四)、自分で物語を書いたものに『りんごの木の下宇宙船』(五二)などがある。作風は温かく、親しみやすい。

(脇 明子)

スワン アンニ Anni Swan 一八七五—一九五八
 フィンランドの作家。児童・青少年向け文学の先駆者。『*Sahaja I* おとぎ話集』(一九〇一)から『*Kotauoreen sahaja ja tarinoita* コタウオリの物語』(五七)まで二〇冊を超える作品集は、明るい現実肯定、人道主義、堅苦しくない理想主義に貫かれ、古典として愛読されている。『波の秘密』『不思議の花』『ペトリと魔法使い』は邦訳がある。翻訳や児童雑誌の編集にも関与。一九六一年にアンニ・スワン賞が制定された。(稲垣美晴)

セ

生活綴方 づいかた 歴史的に特異な性格をもつ日本の公教育制度の内部に一九三〇年代に発生し、発達して今日に至っている日本生まれの教育方法に与えられている呼称。その方法が、散文、詩などの文章表現指導の過程を含んでいるところから、その実践者の中に、教師や社会運動家だけでなく、児童文学や文学を論じ、かつはこれを実践するものが現れることになった。その方法上の特徴は、子どもや青年に、生活に取材したひとまとまりの文章を手順をふんで書かせ、さらにはこうしてできた作品を文集に編集してこれを学級や集団の仲間たちの間に発表させ、討論させ、考え合わせることをもって一つの教育の成立とする点にある。指導原理としてはリアリズムを志向し、指導形態としては国語科作文にとどまらず、各教科にこれをもち込んで、子どもにひとまとまりの母国語の文章を書かせることの大切さをその指導過程上とりたてて重視すると